



しらはた ようぎぶろう
白幡 洋三郎

昭和 47年 3月 京都大学農学部林学科卒
昭和 55年 3月 京都大学大学院農学研究科博士課程単位修得
昭和 55年 4月 京都大学農学部助手
平成 2年 3月 京都大学農学博士
平成 8年 4月 国際日本文化研究センター教授

環境省中央環境審議会臨時委員
(社) 公共建築協会 公共建築賞審査委員会委員
国土交通省都市・地域整備局社会資本整備審議会委員
大学評価・学位授与機構国立大学教育研究評価委員会委員

著書

2000・『庭園の美、造園の心』NHKライブラリー
1997・『大名庭園—江戸の饗宴』講談社
1996・『旅行ノススメ—昭和が生んだ庶民の新文化』中央公論社
1995・『近代都市公園史の研究—欧化の系譜』思文閣出版
1994・『プラントハンター—ヨーロッパの植物熱と日本』講談社 他 著書多数

造園学・産業技術史を専門分野とし、
特に屋外レクリエーションの比較文化的研究を行う。



大きい方の回廊、キオストロ・グランデは刈り込みの芝生だけのたいへんシンプルな中庭だ。しかも一辺が百メートルを超す大平面である。周囲には修道士が居住する僧坊が並んでいる。各自の僧坊を出てこの中庭にたたずむとしても、それは日々の思索の延長ではなかったか。小回廊と大回廊は二つの憩いの場としてそれぞれに修道士の暮らしの内と外をつくりあげてきたものである。

古代～近世まで内と外の区別がなかった日本家屋
その知恵の系譜を生かした住まい方を

中世僧院の中庭を除いて、気持ちのよい戸外空間を室内とうまくつなぐことができなかったヨーロッパに比べて、日本はほとんど屋外と屋内の境界がない生活が普通のものだった。軸組構造の家屋だと、開口部がたくさんとれる。柱や梁以外のところにはみな窓にできるのである。古代・中世・近世を通じて日本家屋は風通しのよい、内外の区別がほとんどない住まいをつくりあげていた。しかし西洋文明に出会うことによって近代化に目覚め、ヨーロッパを模範としはじめたころから、家屋の内向化がはじまった。

外部から遮断された安全で静かな室内。外向きには防御が

整い、自分だけ家族だけの空間を確保できたかに見えた近代の日本家屋。しかし、そんな内向性住居は、季節の移ろいを受け取る感性や地域との交わりを希薄にさせ、あたかも西洋中世への逆行、内に閉じこもる薄暗い家屋への逆戻りを感じさせるものでもあった。

薄暗く息苦しい住まいに対して、わずかながらも外部空間を提供していた西洋中世の中庭。それらがもっていた機能の重みを振り返ってみるのも有意義なことではないか。さらに近代化、すなわち西洋化が万能であったこの百年あまりの生活に、かつての日本がつくりあげていた住まいと暮らしの知恵を再び取り入れることが必要だろう。屋内と屋外の境界が希薄で、生活空間に外部環境を見事に採り入れていた日本の知恵の系譜を生かさぬ手はない。



モンレアーレ修道院のキオストロ(中庭)、シチリア